

2013年度を  
振り返って

CONTENTS

- 2013年度を振り返って……………1
- 今年度の研究を振り返って「学びをデザインする子どもたち」……………2
- ICT活用授業研究会を終えて……………3
- 学習紹介(体育科):子どもが楽しいと実感できる体育の学習をめざして……………4
- 学習紹介(国語科):自分たちで学びを深める……………5
- 学習紹介(算数科):アルゼンチンの日本語教育事情……………6
- 学習紹介(音楽科):表現する楽しさ&聴いてもらう喜び……………7
- 読者のみなさまへ(アンケート・来年度の研究会情報など)……………8

今年度を振り返って



和歌山大学教育学部附属小学校 副校長 沖 香寿美

「Enrichment—豊かな情操—Intelligence—質の高い知性—Creativity—輝く創造性—」これは、本校の教育目標です。21世紀の知識基盤社会を生き抜く子どもには、正しい価値判断や主体的・創造的な行動ができる資質や能力をもつことが望まれます。そのためには、対象の本質や価値、心理などの獲得という学びの結果得られるもの以上に、学びの過程が重視されなければなりません。

私たちは、この教育目標を達成するために、「学びをデザインする子どもたち」というテーマを掲げ、2年目を迎えました。教師が学びをデザインするのではなく、「子どもが学びをデザインする」のです。これは、課題を解決するために、学習対象に向き合い、ときには、学びの過程を修正しながら、主体的な学びを続ける子どもを育てていきたいということなのです。教師は、全てを子どもに任せるものではありません。子どもの学びを丁寧にみとり、支援することが必要であると考えています。そこで、本年度は、新たな自分を「つくる」子どもたちへの支援として「つなぐ・つくる」ことを大切するために、サブテーマを「～つなぐ・つむぐ・つくる～」と設定し、子どもの主体的な学びを追究してきました。

来年度は、「子どもが学びをデザインする」という研究の3年目をむかえます。研究の集大成として、取り組みを進めてまいります。

この1年、校内授業研究、複式教育研究会、夏季教科領域別研修会、教育研究発表会、ICT活用授業研究会など、さまざまな機会を通して授業改革・カリキュラム改革・学校改革に取り組んできました。研究を進めるにあたり、多くの先生方にご指導、ご助言いただくことができましたこと、本当にありがとうございました。

秋田喜代美先生には、平成21年度の教育研究発表会から毎年、本校に来ていただき、ご指導を賜りましたこと感謝いたします。

今日まで、大勢の皆様からいただいたご意見・ご指導を糧に、今後も研究を進めていく所存です。

最後に、機会があるごとに職員や自分に言っていることがあります。今年も、ライブの原稿を書くこの機会に自分に言い聞かせたいと思います。私たちは、日々の忙しさに追われ、いろいろな雑事に振り回されそうですが、どんなときにもぶれてはいけないものがあります。

詩人、高村光太郎さんは、「いくらまわされても 針は 天極を指す」という自分の信念を方位磁石に例えた詩を残しています。私たち教師にとっての天極は子どもです。どんなときにも、目の前の子どもたちを見失うことなく取り組んでいきたいと思ひます。

## 学びをデザインする子どもたち ～つなぐ・つむぐ・つくる～

研究主任  
梶本久子



### 【学びをデザインする子どもたち】

本校は、「学びをデザインする子どもたち～つなぐ・つむぐ・つくる～」という研究テーマを掲げて研究を進めてまいりました。学びをつくりだすのは何より学習主体である子どもたち自身であり、そのような学びを自主的にデザインしていくことができるような子どもたちを育てていきたいということです。

5月以降6月下旬までに22本の校内研究授業を行い、うち10本を各教科・領域部の提案授業としました。そして、授業後の協議会において互いに共有することのできた事柄を我々教職員の『学びの足跡』という形で記録してきました。

そうすることで、教師自身も、互いの「学び」を確かめ合いながら自己の研究に活かしていけると考えたからです。校内研修会では、本校職員はもとより、研究協力校の先生方や、和歌山県教育委員会の先生方、和歌山市教育委員会の先生方、和歌山大学の先生方からご意見をいただき、研究を深めることができました。7月の夏季教科領域別研修会では、それぞれの教科・領域で工夫を凝らした内容で研修会を開催したところ、例年通り、たくさんの先生方にご参会いただき、本校の取り組みに対する貴重なご意見をいただきました。和歌山市の研究会と共催する教科もあり、ともに研究を深める機会にもなりました。

これまでの研究授業や研修会で得たことをさらに活かし、11月1日に教育研究発表会を開催できたことにお礼申し上げます。研究発表会では特に、

教師のみとりと支援がどのような場面で、どのようになされていたのかを通して、

### 子どもたちがどのように学びをデザインしていたのか

という視点で参観いただき、ご意見を伺いました。

秋田先生からは、研究の成果として①聴き合い学び合う関係として、教師の適切なかわりが子どもの思考の流れを焦点化していく授業が観られたこと②環境作りや場の工夫が子どもたちの学び合う姿につながっていることの2点を挙げていただきました。

これまでの研究全体会を通して、

- 一人一人を学びに向かわせるための教師の支援には、いろいろな働きかけがあり、そこを工夫することで「学びをデザインする子どもの姿」が見られるのではないか。
- 聴き合い学び合う学級風土を育てるためには、職員全体で共有できるベースとなるものが必要ではないか。
- 教師のみとりの弱さが子どもの思考の流れを焦点化できないことにつながっていった。子どもたちが自分の学びであることを意識し、主体的に学ぼうとする姿をめざすためにも、より丁寧で的確なみとりがいるのではないか。

の3つを意識してさらに研究を進めていくことにしました。

### 【来年度に向けて】

これまで積み上げてきた研究の成果を活かしつつ、子どもたち一人一人が主体的な学びを実現していけるように、2014年度は最終年度として「学びをデザインする子どもたち」というテーマで研究を進めていくことになりました。そして、「居場所ある学級風土の中で」をサブテーマに、研究主題に迫っていきます。本校では、学習に向かう学級の姿勢や雰囲気や「学級風土」と呼んでいます。そして、長年にわたって受容的な関係づくり、聴き合い学び合う「学級風土」づくりをめざしてきました。来年度はさらに学級独自に行われていた取り組みを学校全体に広め、聴き合い学び合う「学校風土」を築いていきたいと考えております。2014年度の本校の研究にご注目ください。

### 《秋田喜代美先生・佐藤学先生の来校決定!》

ここ数年、本校の研究に携わってくださっている秋田喜代美先生と佐藤学先生に、来年度もご指導いただけることになりました。2014年度の研究発表会は、11月2日（日）開催予定です。お二人の豪華な対談を考えています。ぜひご予約ください。

## 第7回 ICT 活用授業研究会を終えて

本校では、8年前に ICT 活用授業研究会を開催してから今年で7回目を迎えます。本年度は「学びをデザインする子どもたち～個をつなぐ ICT 活用～」という研究テーマのもと研究を進め、1月31日（金）には第7回 ICT 活用授業研究会を開催する運びとなりました。当日は4クラスの公開授業、協議会とお二人の講師先生による対談を元に研究会を行いました。

これまで、ICT 活用が子どもの学びにどのように効果を発揮するのか、そのポイントについて明らかにすると共に、教師の ICT 活用の課題についても研究を続けてきました。それと同時に機器の整備を行い、普段から身近なところで ICT 機器を使える環境を整えてきたので、教員は次第に ICT 機器に慣れ、今では抵抗なく使えるようになり、子どもたちも自然な形で使い方を身につけてきています。

対談では、横浜国立大学の野中陽一先生と和歌山大学の豊田充崇先生のお二人にお話していただき、特に3つのご示唆をいただきました。

- ①教室に設置するところからは始めている
- ②2つの画面に映し出す工夫をしている
- ③情報活用の実践力を育てていってほしい

まず、ICT 機器が活用する教室に常設している点を評価していただきました。使おうとするときに設置をしないとイケない環境では子どもたちも先生も一気に使用頻度が下がるそうです。本校でも普通教室に常設されるようになってから活用が活発になりました。また、1つの画面では同時に二つのものを見ることはできません。しかし、2つの画面があれば、問題提起と子どもの考えを同時に映し出すことができます。最後に、課題としては、子どもたちの情報活用の実践力を育てていくことをあげていただきました。教科の目標を達成するためだけではなく、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力も培っていかねばいけないということです。今後本校では継続して、教科の目標を達成するための効果的な ICT 活用を研究してまいります。情報活用の実践力を高めていくような取り組みも力を入れていきたいと思っております。

皆様からいただいたご意見をもとに、これからも主体的な学びの成立をめざして研究を続けていきます。今後とも、和歌山大学教育学部附属小学校の ICT 研究をよろしくお願ひします。

(ICT 研究部長 馬場敦義)



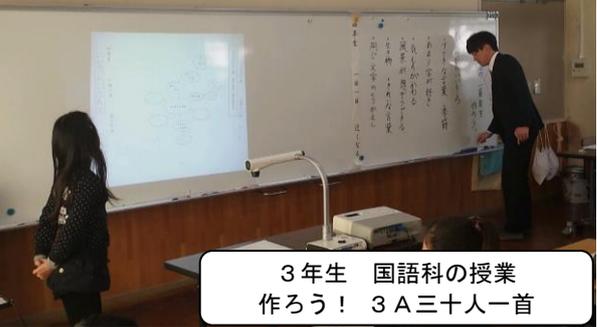
3・4年生 複式の理科  
3年「電気で明かりをつけよう」、4年「ものの温度と体積」



6年生 家庭科の授業  
冬を快適にすごそう



2年生 国語科の授業  
友だちのこと、家ぞくのこと、もっと知りたいな



3年生 国語科の授業  
作ろう！ 3A三十人一首



全体会での様子

## 子どもが楽しいと実感できる体育の学習をめざして

～多様な動きをつくる運動“3Bずもう”を通して～

体育科  
3年B組担任  
則藤 一起



### 1. 「多様な動きをつくる運動」について

「多様な動きをつくる運動は、子どもたちにとって楽しく魅力的な活動を仕組み、伸び伸びと体を動かす楽しさや心地よさを味わいながら、生涯にわたって運動する上で、この時期に身に付けておきたいさまざまな体の基本的な動きを身に付けていく運動です」（\*文部科学省「小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック 中学年」より）

子どもたちを見ていると、よい姿勢が続かない、すぐに怪我をする、友だちと体を使った触れ合いが少ないなどの様子が見られました。また、言い争いからすぐ手が出てしまい、その時に全力でぶつかるといように、力の加減をコントロールできずに行動してしまう子もいます。この時期に、自分の体を知る・力の入れ方を知るといことは相手と付き合っていく上で、とても大切なことだと感じました。そこで「多様な動きをつくる運動」の5つの運動のうち、(ア)体のバランスをとる運動と(エ)力試しの運動を中心として「バランスずもう」と「パワーずもう」に取り組みました。「バランスずもう」では様々な姿勢や組み方で自分の体でバランスをとりながら、相手の力を利用して対戦することによって巧みな動きを身に付けることをねらいとしました。「パワーずもう」では自分の体重を利用したり、力の入れ方を工夫したりして対戦することによって、力強い動きを身に付けることをねらいとしました。

### 2. 授業の実際

初めのアンケートから、多くの子どもがバランス運動を得意だと感じていました。そこで“すもう”と伝えると、力を入れるだけになってしまうのではないかと考え、単元の初めは「バランスくずし（手押しずもう）」として、活動に取り組みました。そうすることで様々な場や方法でバランスをくずし合うおもしろさを感じさせようと考えました。そして存分にバランスくずしを味わった後、力を思いっきり入れる「パワーずもう（引きずもう）」に取り組んでいきました。本単元では相手との対戦が主運動であるため、勝敗には体格の違いが大きく関係してきます。子どもたちが自分の体格や体力との関係で「バランスずもう」と「パワーずもう」のどちらが得意かを考え、それぞれの好みでおもしろいと思える運動に出合うことができるような授業づくりを考えました。そこで、力が弱くても相手の力を利用してバランスをくずしたり、腰をしっかりと落とすことで下から上へと自分の力を相手に伝えやすくなったりできるという“気づき”を大切にしました。初めのバランスくずしから、片足でしたり（図1）、足の広げる幅を変えてみたり（図2）等、動きに様々な工夫が出ました。場所は、初めにマットとざぶとんを用意しました。活動の様子や子どもたちの意見から、足の幅や相手との距離のことが出てきたので、調整箱や踏切板を使いました（図3）。こうすることで、空間の使い方や力の加減、体重移動の方法をさらに調整できると考えました。バランスをくずし合うことで、どのようにすれば耐えることができるのかも考えるようになりました（図4）。これらのことから、バランスずもうで大切なことは足の指先までグッと踏ん張ったり、相手の力加減で力を入れたり抜いたりすることだと感じていました。パワーずもうは、両手で引き合ったり、手を交差させて引いたり動きの工夫が見られ、お互いに全力で引き合うことができました。単元後半はチーム戦により、自分の得意なすもうで相手に挑戦することをめあてにしました。



図1



図2



図3



パワーずもう

### 3. 最後に

子どもたちは、楽しんで“3Bずもう”の学習に取り組むことができました。体格の大きさなどは気にせず、バランスずもうでは、相手の力を巧みに利用していました。パワーずもうでも、手が真っ赤になるほど全力で相手と力を試し合いました。

学習カードに「～すると、・・・ができた」と書くことで、どんな動きに気をつければいいのかを一人一人が理解しながら学習を進めることができました。「〇〇さんは上手だ」「△△くんは強いからやってみてね」等から、「次は〇〇さんに聞いてみよう」「次は△△くんと対戦したいな」とかかわる手立てともなりました。次に行うときは、簡易まわしを準備し、本物のすもうにチャレンジしたいです。

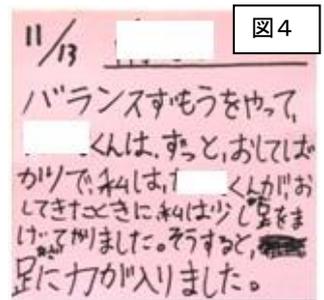


図4

## 自分たちで学びを深める ～6年生国語科「やまなし」の実践より～

複式部  
5・6年F組担任  
北川 勝則



### ○複式学級の子どもたち

複式学級の主体的な学びにおいて、司会役の児童が果たす役割は非常に大きいと思っています。複式学級の子どもたちは、1年生の時から司会をしてきているので、高学年ともなれば授業の進行は全員ができるようになっていきます。しかし、指導者がいない間接指導時に「聴き合い」「学び合い」ができるように司会進行することはなかなか難しいものです。そこで、司会が深めるような進行をできたときをとらえ、学級通信に掲載するなどして、主体的な学び合いが成立するような司会のあり方をクラス全員で共有できるようにしてきました。

### ○子どもたち自身による学びの深まり

話し合いにより、学びを深めていく際に有効になるのは「切り返し」といわれるものです。この切り返しには主に以下の2種類があると考えています。

☆根拠を問う切り返し「どこからそう思ったのですか。」

☆理由を問う切り返し「どうしてそう思ったのですか。」

このような、発話が子どもたちの話し合いの中で活用されることで、子どもたち自身による学びの深まりが期待できるのではないのでしょうか。

### ○授業での具体的な姿

以下は6年生国語科「やまなし」の授業記録です。授業中盤で「五月」と「十二月」の比較に入った部分です。この授業の司会はゆかり（仮名）であり、その部分を太字で表示しています。



①たいち…僕は、五月が明るいイメージで、十二月が暗いイメージです。

②ゆり…たいち君はどうしてそう思ったのですか。私は、逆で五月が暗いイメージで、十二月が明るいイメージです。

③ゆかり…**逆に、なぜゆりさんはそう感じたのですか。**

④ゆり…かわせみが悪いイメージですよね。それが五月にあります。十二月には良いイメージのやまなしが登場するからです。

⑤たくや…僕も、五月に悪役のイメージの動物が多いと思います。

⑥たいち…僕は、色のイメージだと、五月は明るいと思います。逆に十二月は暗いからです。

⑦ゆかり…ゆりさん、**理解できましたか。**

⑧ゆり…たいち君に意見です。私はまだ、五月が暗いと思っています。五月には「鉄色」が出ていますよね。「鉄色」というのは悪いイメージだと思うからです。（後略）

発言①と②では、意見に対立はあるものの、「どちらの方が暗いか」という印象でのみ話し合われています。そこで、司会であるゆかりが③「なぜそう感じたのか。」と切り返したことによって、発言④⑤⑥と「登場人物」や「色」といった根拠をもとにイメージを話し合う展開へと移行していったことが分かります。この話し合いでは、指導者は5年生の方におり、完全に子どもたちだけでの話し合いで進行しています。

司会が、切り返しを意識し話し合いを進めていくことで、自分たちだけでも学びを深めていくことは十分に可能です。今後も、司会の育成に力を入れていきたいと考えています。

## アルゼンチンの日本語教育事情

昨年度末まで、アルゼンチン共和国ブエノスアイレス日本人学校に3年間勤務し、現地の日本語教育について研修してきたことを紹介します。

### 現地の教育事情

生後45日～3歳までの乳幼児を預かる保育園、4歳以上対象の幼稚園があり、5歳の誕生日を迎えると小学校予備校が始まります。初等教育は7年間、中等教育は5年間で、日本の小学校から高校までのシステムと一致します。日本との違いは、日本の義務教育は小・中学校の9年間に対し、アルゼンチンでは初等教育と中等教育の12年間で義務教育になっています。また、就学年齢は日本より1歳早いので、義務教育修了の年齢は17歳です。そして、3月に新年度が始まり、12月中旬で1年の教育課程を修了することが日本の教育システムと大きく違うところです。ちなみに、12月末から約2ヶ月半の長い学年末休業があります。

### 日本語学校: 日亜学院について

アルゼンチン共和国には24の日本語学校があり、ブエノスアイレス市内には日亜学院という最大規模の学校があります。日亜学院は、1927年に日系移民のために開校され、当時はほとんどが日系2世や3世が通っていたようです。しかし、現在日系の児童・生徒の占める割合は2～3割程度になっています。日本人学校とは、30年程前から交流を始め、日本語指導のあり方を合同現教などで研修したり、それぞれ児童・生徒が数名ずつ1週間交換留学したりという形で、交流を行っています。

日亜学院は、幼稚部から中等部を有する私立の学校で、午前中は母国語のスペイン語で授業を行い、午後は週3日の日本語、週2日の英語のカリキュラムを組んでいます。教師集団は、現地の大学で教員養成課程を卒業した日系や現地の方、語学留学のためにアルゼンチンに来てそのまま教員になった方と様々です。しかし、日本語を母体として生活している現状にはない子どもたちを相手に、日本語教育を行う難しさに日々直面しているようです。そこで、日本人学校に派遣された教員と、日本語指導・国語教育等を柱に合同研修を年2回実施しています。

### 日本語教育について: 授業の実際

では、実際どのように授業が行われているのか、昨年度の授業公開の様子を紹介していきます。1年生では、絵本「だるまさんとうさぎさん」の読み聞かせをし、2年生では、西語圏年少者向け日本語教科書「にほんごドレミ」(JICA作成)を使用しながら、「・・・です」という感情を表す形容詞の学習に取り組んでいました。読み聞かせでは、事前に難しい単語の意味を知らせる工夫がなされ、形容詞の学習では、フラッシュカードを用いながら繰り返し定着が図られていました。3年生では、映画「平成狸合戦ぽんぽこ」を使い、好きな台詞を暗唱したり、その中に出てくる単語を使って例文を考えさせたりしていました。4年生では、日本語の朗読大会に向けて、「スイミー」の暗唱に取り組んでいました。日本では2年生の教材ですが、情景がイメージしやすく、短文で構成されている内容が意味もわかった上で暗唱しやすいものとして取り入れられたようです。5年生では「音楽」の歌唱指導を通して、発声から日本語に慣れていくという工夫がされ、6年生では「日本の情報」を扱い、インターネットや書物を用いて、各県の文化や歌、産業などをレポートにまとめていく取り組みをされていました。

### ～日本語教育から日本の文化・和の心を伝える～

アルゼンチンには、日本の文化(特にマンガや華道・茶道・着物の着付けなど)に興味をもっている方が非常に多いです。日亜学院への入学希望者もそんな実情が色濃く反映されているのでしょう。日系移民の異国の地においても日本の文化・教育を子どもたちに受け継がせてやりたいという思いが、現在は形を変え、アルゼンチン人の心にも日本の文化・教育が浸透してきているのを感じました。日本語教育を通じて、更に日本の文化・和の心が異国の地アルゼンチンに広がっていくことを期待したいです。

算数部  
北端 一喜



文具用品を日本語・スペイン語で表示



フラッシュカードを使用した日本語の習得



日本語教科書「にほんごジャンプ」を使っでの授業

## 表現する楽しさ&聴いてもらう喜び ～2Bミニコンサート♪を通して～

音楽科

2年B組 担任

内垣 美佳



### ○きっかけは、大好きな「スイミー」から…

学級の取り組みとして2Bミニコンサートを開くことしたのは、「スイミーの音楽物語を発表したいなあ。」という子どもの発言がきっかけでした。「スイミー」は、2年生の1学期に国語科の授業で学習する物語です。本学級では、国語科で学習した後、音楽科と関連付けて「ようすや気持ちを思いうかべ歌おう～スイミーの音楽物語～」という題材を設定しました。子どもたちは、お話の流れも登場人物の気持ちもよく理解しています。だからスイミーの歌を歌っているととても楽しく、所々に朗読も入っているのが気に入った様子でした。「スイミーの音楽発表やってみたいなあ。」という初めは数名の子どもたちの思いが、クラスみんなに広がりました。

### ○どの曲なら喜んでもらえるかな？どんな工夫ができるかな？

4月から朝の会でいろんな曲をクラスみんなで歌ってきました。歌える曲が増えたのだからスイミーの音楽物語だけではなく、その中からも何曲か歌って「2Bミニコンサート」を開くことにしました。まずは、曲選びです。自分が好きな曲や歌いたい曲を出し合っていた子どもたちでしたが、みんな話し合っていくうちに、自分が好きな曲と聴いてくれるお客さんたちが聴きたい曲はちょっと違うかもしれないな、ということに気づきました。「聴いてくれる人も知っている曲を歌ったらみんなで歌えるよ。」という意見も出て、全部で3曲歌うことになりました。



<グループに分かれて本番前の準備中>

- \* 「ちょっとまって流れ星」(松田惣一郎 作詞・作曲)
- \* 「スイミー」(レオ=レオ二 作 谷川俊太郎 訳 薬師神武夫 作曲)
- \* 「世界に一つだけの花」(槇原 敬之 作詞・作曲)

スイミーの場面ごとの大きな絵を作成しているところです。打楽器を入れたりスイミーのお面もかぶったりして、少しでも自分たちオリジナルの発表にしようと工夫を凝らしました。ミニコンサートの準備を通して、みんなで協力することの大切さも学ぶことができました。

### ○さあ、いよいよ本番♪

2Bミニコンサートは2回行いました。1回目は、2Aさんと2Cさん、いつもお世話になっている学校の先生方に聴いてもらいました。そして、2回目はお家の方に聴いてもらいました。2回ともアンコールでは、その場にいた人みんなが「世界に一つだけの花」を笑顔で一緒に歌ってくれことに子どもたちも喜びを感じていました。

今日、五時間目に2Bミニコンサートがありました。それで、さいしょの曲は、「ちょっとまってながれぼし」でした。お母さんの好きな曲です。とても楽しみにしていました。

ぼくは、一番楽しみにしていた曲は、「せかいに一つだけの花」です。なぜかという、ふりつけをするところが、かっこいいからです。

みんなで声を合わせると、とてもきれいに聞こえて気持ちがいいです。お母さんも「とってもよかったよ。」とほめてくれました。本当にさいこうでした。

また、いつかやりたいです。(児童の作文より)



<本番です！～スイミーたちのように心を一つにして～>

音楽は、人の心を動かす大きな力をもっていると思っています。子どもたちには、これからも音楽を通して表現する楽しさをもっと味わい、さらに、自分たちの音楽を発信していくことで、聴いてくれる人たちと一体になれる感動を味わってほしいと考えています。

